令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	愛媛県	学校名	砥部町立麻生小学校

人権課題	子供	対象学年・取り扱った教科等	全学年 各教科・特別活動など	時数等	１年生　64単元　２年生　54単元 ３年生　45単元　４年生　50単元 ５年生　44単元　６年生　53単元

目標・人権教育のねらい	・自分・他者・郷土等との多様なかかわりを通して、自己肯定感を育むとともに自他の相違を認め、自分も友達もふるさとも大好きな児童を育てる。 ・生活の中にある不合理や偏見を見極め、様々な問題を自分事として捉え、主体的に行動・解決しようとする児童の育成を目指す。
実施した内容	・「麻生っ子スマイルトーク（話合い活動）」「構成的グループエンカウンター」「なかよし班活動」「人権集会」等の活動を通して、人権が尊重される温かい人間関係づくりの場を積極的に設ける。 ・愛媛県教育委員会が運用を開始した人間関係構築力を育成するためのプログラム「ジブンミカタプログラム」を活用する。 ・学校運営協議会を活用し、学校・家庭・地域が連携した人権・同和教育の推進を図る。
工夫した点	・ペアやグループでの話合いを「麻生っ子スマイルトーク」と位置付け、全ての学習活動で取り組んだ。低学年では、「伝え合いのキーワード」を提示することで聴く力の素地を養い、中高学年では思考ツールを活用して話合いの可視化を図り、自他の考えを比較しながら学び合うことができるように工夫した。 ・「なかよし班活動」の活動の一つとして、ウォークラリー遠足を実施した。地域にある「えひめこどもの城」で実施することで協働を大切にしようとする心情を育てたり、異年齢集団活動を通して幅広い人間関係を経験させたりすることができるようにした。 ・「人権集会」では、児童一人ひとりが自分事として捉えることができるようにオープニング劇の内容を工夫し、課題意識をもたせた。人権劇では、友達への言葉遣いについて日常生活でよくある場面を設定し、全校児童で友達とのかかわり方について具体的に考えられるように工夫した。 ・「ジブンミカタプログラム」を活用し、１人１台端末上で回答するセルフチェックに基づく実践、振り返りを通じて、自己理解・他者理解を進め、安心できる人間関係を構築し、自分らしくいられるための力の育成を図った。 ・「学校・地域連携カリキュラム」を作成し、効率的・効果的に地域の方と協働活動を実践できるようにした。また、職員室内に掲示板を設け、地域学校協働活動推進員との連携が取りやすいように工夫した。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	・道徳科や特別活動、総合的な学習の時間をはじめ、国語科、社会科、理科、生活科、外国語科（外国語活動）において、系統性を鑑みながら教科横断的に人権学習を実践した。
事業成果	児童の意識の変容を把握するため、「自分が好き　友達が好き　アンケート」を令和７年５月、令和７年１２月に実施した。 ・【知識的側面】 「自分のよいところを知っているか」　77%→79% 「すべての人が、大切にされなくてはならないと思うか」　94%→95% 自分のよさを自覚できた児童が少し増えた。教職員全員が、一人ひとりを大切にすることを意識した言葉遣いで話したり、道徳科や学級活動、人権集会等で、自分自身とのかかわりを深める機会を設け、自分のよさを見つめる活動を積極的に取り入れたりした成果と考えられる。 ・【価値的・態度的側面】 「友達と仲良くなれるよう、自分から行動しているか」　89%→91% 「よりよい仲間づくりに、進んで参加しようと思うか」　93%→94% 麻生っ子スマイルトークを積み重ねることで、自分とは異なる多様な意見を受け入れ、みんなで協力していこうと考える児童が増えたことがうかがえる。また、なかよし班活動や学校行事、地域での学習活動を通して、助け合おうとする仲間意識に支えられた関係づくりができつつある。学校内外での多様なかかわりを通して、自他の相違を認め、友達やふるさとに進んでかかわろうとするなどの、児童の意識の変容が見られた。 ・【技能的側面】 「友達の話や意見を、最後まで聞くことができているか」　95%→96% 「友達と協力して、行動するようにしているか」　94%→97% 道徳科をはじめ、各教科の学習において、よくないと思ったことを見過ごさず、自分にできることを考えて行動することの大切さを学んだことで、主体的に行動しようとする力が高まったと思われる。そして、かかわりを通じて得た仲間の大切さや、仲間づくりの楽しさを味わわせることで、差別やいじめ解消のための協力者の必要性に気付くことができたのではないかと考えられる。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	愛媛県	学校名	砥部町立麻生小学校

人権課題	高齢者	対象学年・取り扱った教科等	小学４年生・総合的な学習の時間	時数等	20時間

目標・人権教育のねらい	・高齢者との交流活動を通して、高齢者や福祉施設の方の思いや願いについて理解を深める。 ・高齢者と共によりよく生きていくために、自分にできることを話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりする。 ・高齢者と共によりよく生きていくために、自分にできることを考え、実行できる行動力を培う。
実施した内容	・高齢者にとって住みよい町について考える。 ・福祉体験を通して、高齢者の生活や困り感を理解する。 ・高齢者にとって住みよい町にするために自分たちにできることについて調べたい課題を設定する。 ・地域の福祉施設を見学する。 ・高齢者と交流を深めるためにできることを考える。 ・高齢者と交流を深める。 ・交流して感じたことを新聞等にまとめて発表する。 ・高齢者と共によりよく生きていくために大切なことや自分にできることを考え、実生活に生かす。
工夫した点	・活動のねらいを明確にして、福祉施設等の方との打ち合わせを綿密に行った。 ・車椅子・歩行体験や手話体験、アイマスク体験を行ったことで高齢者の生活の様子や困り感について理解を深められるようにした。 ・交流相手のことをよく知るために、交流活動の前に福祉施設の方と話し合う機会をもち、交流活動の内容や準備物などについて相談した。 ・交流して感じたことを福祉施設の方に聞いていただくことで自分にできることを実行する意欲を高めた。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	・社会科「風水害からくらしを守る」において、共助の大切さを理解させ、高齢者と共によりよく生きようとする態度を育てた。 ・国語科「『便利』をさがそう」において、身のまわりの道具や設備について振り返り、どんな人でも使いやすくなる工夫についてまとめることを通して、バリアフリーやユニバーサルデザインについて理解を深めた。
事業成果	児童の意識の変容を把握するため、「自分が好き　友達が好き　アンケート」を令和７年５月、令和７年１２月に実施した。 ・【知識的側面】 「高齢になると、体にいろいろな変化があることを知っているか」　98%→99% ５月は、「あまり歩けない。」「耳が聞こえなくなる。」など、身近にいる高齢者の印象で捉えている児童が多かった。12月は、「筋肉が減って手足が動かしにくい。」「少しの段差でもつまづきやすくなる。」など、内容がより具体的になった。また、「一人では歩きづらくても杖やスロープ、手すりがあれば動くのが楽になる。」「高齢になっても細かい作業が得意な人や元気いっぱいの人もいる。」など、一人ひとり体の変化は違っており、福祉用具や周りの助けがあることで生活しやすくなることに気付くことができた。 ・【価値的・態度的側面】 「困っている高齢者のために、できることをしたいと思うか」　95%→100% ５月は、「声を掛ける。」「助ける。」など、抽象的な意見が多かった。12月は、「相手の目の高さに合わせてゆっくり話し掛ける。」「相手がどんなことに困っているか聞き、一緒にする。」など、自分にできることを具体的に考えることができた。実際に高齢者と交流した際には、相手に寄り添った行動が多く見られた。高齢者一人ひとりの思いや願いをよく聞き、自分にできることをしたいと意欲を高めていた。 ・【技能的側面】 「高齢者の気持ちを考え、助けることができるか」　97%→99% ５月は、「車椅子を押す。」などの意見が多かった。12月は、「声を掛けて困っていることを聞いてから手助けをする。」など、高齢者一人ひとりに合わせて、自分にできることを具体的に考えることができた。高齢者と交流した後、自主的に福祉施設に行って、高齢者との交流を続けている児童もいる。高齢者と共によりよく生きていくことのよさに気付いている様子がうかがえた。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	愛媛県	学校名	砥部町立麻生小学校

人権課題	障害者	対象学年・取り扱った教科等	小学４年生 総合的な学習の時間・道徳科	時数等	20時間

目標・人権教育のねらい	・障がいのある人との交流活動を通して、障がいのある人や福祉施設の方の思いや願いについて理解を深める。 ・障がいのある人と共によりよく生きていくために、自分にできることを話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりする。 ・障がいの有無によらず、相手を尊重しながら共に生きるために、自分にできることを考え、実行できる行動力を培う。
実施した内容	・障がいのある人にとって住みよい町について考える。 ・福祉体験を通して、障がいのある人の生活や困り感を理解する。 ・障がいのある人にとって住みよい町にするために自分たちにできることについて調べたい課題を設定する。 ・地域の福祉施設を見学する。 ・障がいのある人と交流を深めるためにできることを考える。 ・障がいのある人と交流を深める。 ・交流して感じたことを新聞等にまとめて発表する。 ・障がいの有無によらず、相手を尊重しながら共に生きていくために大切なことや自分にできることを考え、実生活に生かす。
工夫した点	・活動のねらいを明確にして、福祉施設等の方との打ち合わせを綿密に行った。 ・車椅子・歩行体験や手話体験、アイマスク体験を行ったことで障がいのある人の生活の様子や困り感について理解を深められるようにした。 ・交流相手のことをよく知るために、交流活動の前に福祉施設の方と話し合う機会をもち、交流活動の内容や準備物などについて相談した。 ・交流して感じたことを福祉施設の方に聞いていただくことで自分にできることを実行する意欲を高めた。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	・社会科「風水害からくらしを守る」において、共助の大切さを理解させ、障がいのある人と共によりよく生きようとする態度を育てた。 ・道徳科「ええことするのは、ええもんや！」の学習を通して、相手の気持ちを考え、進んで親切にしようとする態度を養った。
事業成果	児童の意識の変容を把握するため、「自分が好き　友達が好き　アンケート」を令和７年５月、令和７年１２月に実施した。 ・【知識的側面】 「いろいろな障がいがあることを知っているか」　97%→100% ５月は、「耳が聞こえない。」「目が見えない。」など、身体的な障がいについての意見が多かった。12月は、精神障がいなどの目に見えにくい障がいについての意見が増えるなど、障がいについての理解がより深まった。障がいは見た目で分かるものだけではないということを理解した児童が多い。また、一人ひとり特性に違いがあり、周りの助けがあることでできることが増えるということにも気付いた。 ・【価値的・態度的側面】 「障がいのある人のことを大切にしようと思うか」　98%→99% ５月は、大切にしようと思うと答えた児童が多かったが、実際に何をすればよいのか分からない児童もいた。12月は、身近には様々な障がいのある人がいることに気付き「積極的に話し掛ける。」「困っていることを聞く。」「相手の気持ちを受け入れる。」など、より具体的に自分にできることを考えることができた。交流した際には、相手のやりたいことを聞いて一緒に活動することを楽しむ様子が見られた。 ・【技能的側面】 「障がいのあるなしにかかわらず、誰とでも協力して行動できるか」　98%→99% ５月は、誰とでも協力して行動したいと答えた児童が多かったが、自信をもって行動に移せない児童がほとんどであった。12月は、一人ひとりの特性に合わせて自分にできることを具体的に考えることができた。例えば、身体的な障がいのある人には、声を掛けてその人が必要とする手助けをし、精神的な障がいのある人には、その人のペースに合わせて話したり、一緒に遊んだりした。児童一人ひとりが相手を尊重しながら共に生きるために、自分にできることを考えられるようになってきている。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	愛媛県	学校名	砥部町立麻生小学校

人権課題	同和問題	対象学年・取り扱った教科等	小学６年生 社会科・道徳科	時数等	９時間

目標・人権教育のねらい	・差別の現実に深く学び、人権獲得のために闘ってきた人々の憤りや思いについて知り、同和問題をはじめとする様々な差別に対する正しい理解と認識を深める。 ・差別のない社会の実現に向けて、差別の不合理さに気付き、自他の権利を尊重しながら差別の解消やいじめの防止に対して主体的に行動しようとする態度と実践力を養う。
実施した内容	・身分の上で差別されてきた人たちが、優れた文化をつくったことに気付く。 ・身分が区別され、武士が支配する社会の仕組みが整えられたことを知る。 ・江戸幕府の身分による支配の仕組みを知るとともに、差別されてきた人々が厳しい制約を受けながらも、いろいろな工夫や努力をして社会や文化を支えたことを知る。 ・厳しく差別されてきた人々が優れた解剖の技術を生かして医学を支えたことを知る。 ・1871年の法令によって制度の上では平等とされたが、政府が差別をなくすための政策をとらず、差別は新しい形で残ったことを知る。 ・就職や結婚などで差別され、苦しめられてきた人々が全国水平社を結成し、差別をなくす運動を進めたことを知る。 ・道徳科「人の世に熱あれ　人間に光あれ」では差別を受け続けながらも全国水平社運動を起こした西光万吉たちの生き方を学び、差別をしない生活を送っていこうとする態度を養う。
工夫した点	・社会科の学習を中心に同和問題学習に系統性をもたせて指導を行った。同和問題に関わる内容は重点的に押さえて学習を進めた。その際に、ペアやグループで話し合わせたり、振り返りで自分の考えを書かせたりする活動を通して、差別され苦しめられてきた人々に対する思いや、差別に対する憤りをもつことができるようにした。ワークシートをファイリングすることで、学習したことをすぐに振り返れるようにした。また、学習の振り返りを教室や廊下に掲示することで、児童がつながりを確認できるようにした。 ・身分制度が改められてからも約50年もの間、差別が続いていたことを押さえ、差別への憤りをもたせた。 ・山田少年の言葉について考えることにより、差別のない世の中を目指して差別されてきた人々が自ら立ち上がったことを理解させるようにした。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	・学級活動「人権について考えよう」では、自分たちの身の回りにある不合理や矛盾に気付き、基本的人権を守っていこうとする心情を高めた。
事業成果	児童の意識の変容を把握するため、「自分が好き　友達が好き　アンケート」を令和７年５月、令和７年１２月に実施した。 ・【知識的側面】 「いじめや差別は、どんな理由があってもいけないことだと思うか」　99%→99% 社会科や道徳科の学習を通して、住む場所によって厳しく差別されている人がいたことや差別され苦しめられてきた人々が立ち上がり差別を無くす運動を起こしたことを理解することができた。 ・【価値的・態度的側面】 「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思うか」　87%→92% 「考え方や感じ方には、それぞれ違いがあってもよいと思うか」　100%→99% 麻生っ子スマイルトークを行い、自分と違う意見に触れる機会を充実させることで、「自分と違う意見について考えるのは楽しい。」と思う児童の割合が増えた。学習後の感想では、「生き方は人それぞれだから、その人なりの意見を『だめだ』とか言うのではなくて、尊重していきたい。いくら立場が違っても価値はみんな同じ。」といった記述が見られ、自他の意見を大切にしようとする態度が育ってきていると感じることができた。 ・【技能的側面】 「いじめや差別をなくすために自分から行動できるか」　71%→70% 肯定意見の割合はほとんど変化していないが、「できる」と強い肯定を示す割合が20%から40%に増加した。道徳科の意見や社会科の振り返りの記述からも「差別をなくしたいと言うだけでなく、できることから行動したい。」といった記述が見られ、相手の立場に立って考え、いじめや差別をなくすために困っている人に声を掛けたり、相手のことをよく知ろうとしたりするなど、自分にできることを真剣に考える姿が見られた。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	愛媛県	学校名	砥部町立麻生小学校

人権課題	インターネットによる人権侵害	対象学年・取り扱った教科等	小学５年生 学級活動・道徳科・国語科	時数等	学級活動１時間 道徳科１時間 国語科２時間

目標・人権教育のねらい	・インターネットやＳＮＳにおけるコミュニケーションの特徴について知り、利用の際の課題や正しい活用の仕方について理解する。 ・インターネットにおける様々な人権問題について学習することを通して、互いの人権を尊重しながら、よりよい人間関係を築いていこうとする態度を育てる。 ・相手の立場を想像したり、相手の気持ちを考えたりしながら、インターネットやＳＮＳにおいて友達とかかわることができる。
実施した内容	・学級活動「インターネットにおける人権」を学習し、インターネットやＳＮＳの利用における人権侵害が身近にあることに気付き、友達とかかわるときに大切なことについて考え、これからのめあてを決める。 ・道徳科「知らない間のできごと」を学習し、相手を正しく理解し、自分の思いをきちんと伝えることが、よりよい友達関係を築くことにつながり、信頼し合って友情を深めていこうとする。 ・国語科「言葉で伝える、心を伝える」を学習し、言葉には相手とのつながりをつくるはたらきがあることを知り、相手の立場に立って詳しく伝えたり、確認したりする。
工夫した点	・学級活動では、動画の視聴を通して、ＳＮＳ上でやりとりする互いの立場について考えさせることで、どちらの立場にも改善点があることを捉えさせ、問題の原因は様々な要素が重なっていることに気付かせた。さらに、仲間外しをされた子の気持ちに共感させながら話し合うことで相手の気持ちを考えてかかわることの大切さを実感させた。終末に、日頃、友達とかかわる時に大切にしていることを想起させることで、インターネットやＳＮＳ上で相手の顔が見えなくても、大切なことは同じだということを理解させた。 ・道徳科では、情報モラルの観点をおさえるとともに、どのような態度で友達とかかわるべきかについて、グループでの話合いを通して考えられるようにした。 ・国語科では、グループでロールプレイングとその振り返りを行い、対面での場合とＳＮＳ上での場合を比べさせることで、ＳＮＳ上での文字のやりとりでは、対面で話をする時以上に相手の立場に立って考えて伝えることが大切だということを実感させられるようにした。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	・社会科「情報化した社会と産業の発展」の学習で、インターネットを利用する際の問題点について考え、どのようなルールやマナーを心掛けて情報を活用すればよいかということについての理解を深めた。
事業成果	児童の意識の変容を把握するため、「自分が好き　友達が好き　アンケート」を令和７年５月、令和７年１２月に実施した。 ・【知識的側面】 「インターネットを使うときに気を付けることを知っているか」　80%→86% 「ＳＮＳ上でも、いじめや悪口は絶対にしてはいけないことを知っているか」　96%→99% 学習後は、ほとんどの児童がインターネットやＳＮＳの利用上の注意点について理解することができた。児童の振り返りには「できていないところがあると思ったので、ルールやマナーを守ってＳＮＳを使うようにしていきたい。」といった内容がいくつも書かれており、インターネットやＳＮＳの使い方を学ぶよい機会となった。 ・【価値的・態度的側面】 「ＳＮＳ上でも、いじめや差別を許さない態度が身に付いているか」　91%→97% 学習後の振り返りでは、「動画を見て考えることを通して、勝手にルールを決めたり、仲間外しなどのいじめをしてはいけないと思いました。」といった記述が見られ、ＳＮＳ上でもいじめや差別を許さない態度が育ってきていると感じることができた。 ・【技能的側面】 「インターネットを使って言葉のやりとりをするとき、相手のことを考えているか」72%→83% 「ＳＮＳ上でも、相手の立場に立って話し合うことができるか」　92%→95% 「相手がどう思うか考えてからメッセージを送ったり、話したりするようにしたい。」などと多くの児童が振り返りに相手のことを考えた内容を書いていた。その後の児童の様子からも友達とのコミュニケーションの中で、言葉を慎重に選んで会話をしたり、相手に言葉の受け取り方を確認したりするなど、授業で学んだことが少しずつ日々の生活にもつながってきていることがうかがえた。